

## 「奥行きを感じる」のアーカイブ

平成28年度 活動報告

本研究は、本学のテーマ演習において2012年度に立ち上げられた授業を土台とし(12年度「モデリング」、13年度以降「奥行きを感じる」と改題)、16年度に「『奥行きを感じる』を求めて—新しい奥行き知覚から導かれる新共通感覚の構築」という課題名で科学研究費を獲得している。

これまでの研究では、古今東西のさまざまな美術作品の中から、可能な限り偏りがないように、参加者間の協議によって対象とする作品(作家)を選び、その造形の仕組みに焦点をあてて検証を行ってきた。主なものは、「宋元画」「ジャコメッティ」(12年度)、「セザンヌ」「屏風絵」(13年度)、「ブールデル」「長谷川等伯」(14年度)、「縄文土器」(15年度)である。

科学研究費を獲得した初年度である今年度は、引き続きテーマ演習を実験的な研究の場として継続する一方、これまで研究対象としながら実作品を鑑賞する機会を得ずにいた作品について、改めて、このプロジェクトに参加しているさまざまな領域の研究者と共に実地に赴き、作品の鑑賞体験を共有し、今後の問題点を挙げることに重点を置いた。

実地研修では、これまで扱ってきたセザンヌ、ブールデルなど、西洋近代美術を代表する作家の作品群と、その周辺の作品群をパリでの研修において実見し、また、ジャコメッティについては上海で開催された回顧展において初期から晩年までの作品を俯瞰する貴重な機会を得た。縄文土器については、新潟にある十日町市博物館まで出向き鑑賞する機会を得た後、近年発掘された土器の完品と破片を借り受け、大学にて実物を前に摸刻することで、造形の仕組みを直接経験しながら議論することができた(図1)。その詳細については今年度の本学美術学部紀要61号(2017年3月)に掲載される。

テーマ演習においては、奈良国立博物館において陳列された《信貴山縁起絵巻》を鑑賞した後、絵巻物の構造を議論し、2つの実技課題を提案して制作・検証を行った(図2)。

実作品を前にすると、作品写真とは全く異なる印象を抱くことが多くある。本研究の題名に「感覚」とある以上、この研究で相手にするものは、作品の周辺にある知識ではなく、我々の身体感覚を駆使して、実物の造形から看取される実感そのものである。今回の実地研修では、改めてその前提からスタートすることになった。

実際の空間に存在する彫刻作品はもちろんのこと、写真と同じ平面である絵画作品においても、描画材料の微妙な厚みの差異にみる運動の記憶や思考の時間的厚み、また、色彩の織り成すニュアンスや画面のスケールなど、それらすべての条件が整って初めて、制作者が目指したであろう感覚を生々しい実感として追体験することができる。写真で理解できるのは、あくまで、それらがそぎ落とされた後に残る表層のみなのである。

私たちは日常の中で視覚や聴覚、触覚などの五感を鍛えている。この感覚を飛び越えて美術があるとは到底思えない。

本研究において、これまで議論にとどまらず実技制作を大切にしてきたのは、毎回俎上に上がる作品とこうした身体感覚を引き離さないためであり、この身体感覚を通して造形を認知することが前提であるならば、美術を複雑な知に任せなくても、作品を味わうことはコツさえつかめば誰でもできるはずである。その意味で本研究の題名にある「奥行き」は、単なる距離ではなく、あらゆる造形から感覚される深さへの導きを示唆しているのである。

約1万5千年前にさかのぼる縄文土器が教えるのは、現代に生きる我々の造形感覚が彼らの造形的な美意識から何ら進歩していないという事実である。絵画や彫刻という領域で分断することで技法や理論は細密化したがる、本来的な造形感覚や身体感覚に大きな進歩はない。

次年度は実空間と画の一体化する、原始の洞窟画について検証し、実地研修を予定している。

小島 徳朗(美術学部准教授)